

# 茶の湯の復興と近代数寄者の台頭

The revival of the tea ceremony and the emergence of tea  
connoisseurs in the Meiji period

齋 藤 康 彦

Yasuhiko SAITO

## I 課題の設定と資料

明治維新を迎え、社会の様々な場面において急激に進行する「近代化」過程で、それまでの茶の湯の有力な存立基盤のひとつであった封建領主層、とりわけ諸大名といった後ろ盾を一挙に失った茶の湯の世界は著しく衰退していった<sup>1)</sup>。しかし、まったく衰微していったわけではなく、茶の湯は「伏流水」の如く細々ながらも続けられ、広く知られているように、明治30年代に入ると益田 孝（鈍翁）や馬越恭平（化生）らに代表される新興の財界人を中心とした近代数寄者と呼ばれた一団による広範な活動が顕在化してくる<sup>2)</sup>。さらに、別稿で詳しく検討するが、明治43年（1910）以降になると、高橋義雄（箒庵）の『東都茶会記』の刊行にはじまる一連の「茶会記」によって近代数寄者の活動内容が克明に記録されるようになった。ここにいたり本来経済史を専攻する筆者にとって最大の問題関心である近代数寄者を中心とする政界、官界、実業界の横断的なネットワーク形成の実態を具体的に把握できる環境が整うようになる。

この間、三千家をはじめとする諸流派の家元たちも北野神社や梅尾高山寺といった京都を中心に神社仏閣における献茶という形態で茶の湯の再生を図ると同時に、家元による地方茶人たちの組織化も進んだことなどは先行研究に詳しい<sup>3)</sup>。しかし、筆者としては明治期における茶の湯の全般的な動向を探ろうとは思っていない。茶人たちが形成したネットワークにこそ興味がある。そこで本稿では高橋義雄『東都茶会記』の刊行に先立った時期、言い換えれば、近代数寄者による本格的な活動展開の前史ともいえるべき明治初年から明治42年（1909）までの期間を対象として、茶人たちのネットワークを析出するところに課題を設定する<sup>4)</sup>。

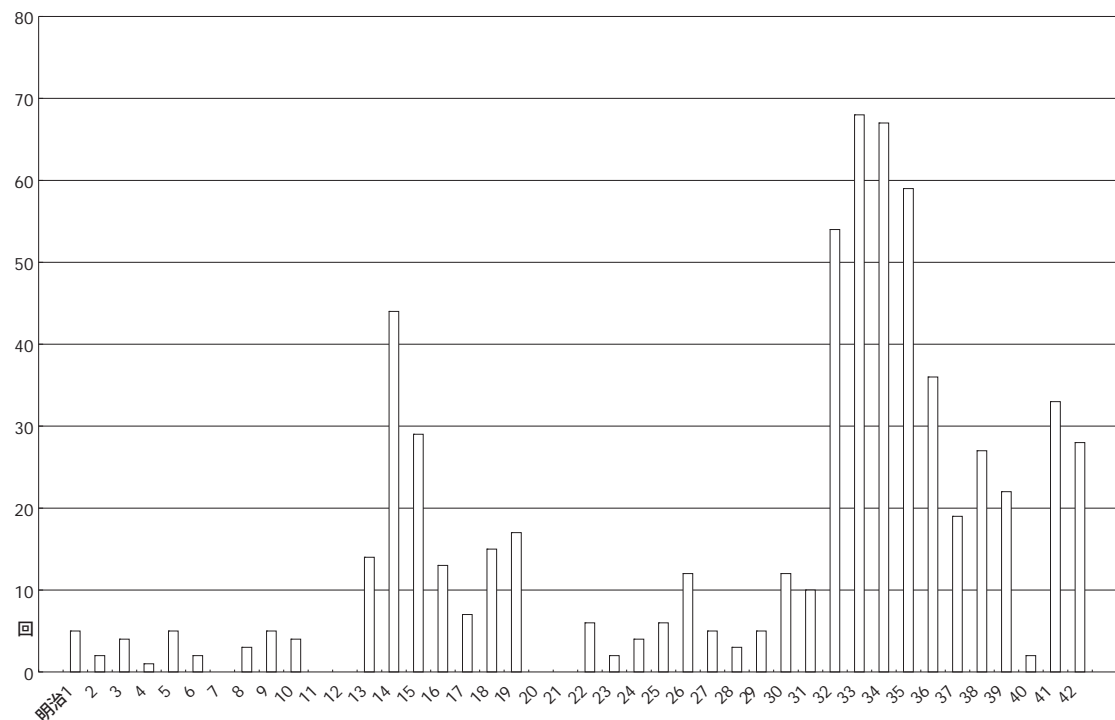
前述したように茶の湯の活動が低迷していたことを反映してか、情報源としての利用に十分に耐えうる「茶会記」の残存が決定的に少ないという資料的な制約は覆うべくもない。高橋義雄『東都茶会記』を除いて、筆者がこれまでの資料調査を通じて所在確認した茶会出席者を把握できる比較的多かった明治期の「茶会記」は、野崎広太（幻庵）『茶会漫録』（1912年）、山本 寛（麻溪）『古今茶湯集』（1917年）、安田善次郎（松翁）『松翁茶会記』（1928年）、益田 孝『風流記事』（1992年）の4冊に過ぎない<sup>5)</sup>。その中で明治初年にまで遡れるのは『古今茶湯集』のみであり、これに続く『松翁茶会記』が書き始められたのは明治13年（1880）である。なお、益田 孝『風流記事』によれば明治29年（1896）から同37年（1904）にかけて益田 孝が開催した茶会の、また、野崎広太『茶会漫録』からは明治38年（1905）以降の野崎が出席した茶会の動向が判明する。そこで本稿では、これらの4つの「茶会記」を主な情報源として使用する。そのため検討の範囲は東京を中心とせざるを得ない点は予め断っておく。

分析に先立ってデータベース構築の作業手順を詳しく説明しておきたい。まず、前述した4つの「茶会記」に記載された茶会の日時、席、亭主と茶客を肩書きを含めてすべて書き上げ、それらを編年的に並べた上で統合する。勿論、それぞれの「茶会記」にみられる重複は除いたが、茶客数や人名など記載内容の異同も目に付いた。この場合は、参加者の多い「茶会記」の茶会を採用した。ところで、『古

『今茶湯集』には三千家による茶事の記録も散見されるが、そのほとんどで茶客名の記載を欠いている。本稿における筆者の問題関心が茶人のネットワーク形成の析出にあるので、出席者が書かれていない三千家の茶会は除いた。『松翁茶会記』、『風流記事』、『茶会漫録』でも茶客が不明であった茶会は同様に処理した。なお、「婦人三人」、「相伴二人」、「他一名」などの個人を特定できない記述は最初から無視した。ちなみに、茶会のカウントは、数日間にわたって連続して開かれた場合は1日を1回と数え、同一日の正午と夕刻の開催は2回と数えた。

しかし、別稿で使用する高橋義雄の「茶会記」とは異なって、茶会への出席者が苗字のみや渾名などで記されているケースも多く、記述内容は必ずしも正確ではなかった。苗字だけ、あるいは渾名などの場合は、可能な限り前後する茶会の記述、あるいは他の「茶会記」や『万象録』、先行研究などで補った。しかし、「益田」だけの記載では、いわゆる益田三兄弟の益田 孝、益田克徳（無為庵）、益田英作（紅艶）の区別ができず、また、「三井」と記された場合は三井一族での該当者も多く、仮に亭主であったとしても茶会における茶道具、書画などによって三井高弘（松籟）あるいは三井高保（華精）を特定できないケースも少なくなかった。勿論、茶客レベルでは手懸かりすらないといって過言ではない。現在のところ、苗字や渾名だけの人物を確定するだけの資料を持ちあわせていないので、そのままとせざるを得なかった。従って、亭主や茶客の人数はダブルカウントによって実際よりは多くなっている点は予め断っておきたい。

なお、『風流記事』に記載された益田 孝が主催した大師会の記述については、別稿において分析対象とするので、今回は全て略した。また、旧平戸藩主で石州流の一流派である鎮信流茶道の家元でもあり、後に和敬会の中心メンバーとなる松浦 詮（心月）は、明治35年（1902）2月23日から同年12月28日にかけて、心月庵において鎮信流祖松浦鎮信の天祥公追善茶会百会を開催している<sup>6)</sup>。招待者数は延べ517人にも達する。この茶会を構築したデータベースに加えると攪乱要因ともなるので、第4節において別に検討を加えることとした。



(第1図) 茶会開催件数の推移

ちなみに、前述した作業によって確認できた茶会開催回数は650回、亭主数は117人、茶客数は延べ3,160人を数える。勿論、使用した4つの「茶会記」の記述によって確認できたものだけであり、該時期に開かれていた茶会を網羅的に把握したものではないことは言うまでもない。

ところで、分析対象とする期間は明治維新を起点として40年を超える長期間にわたっている。明治期のわが国の平均寿命を考慮すれば、世代的には二世代にも及ぶ時間である。その上、この40年間を通じて日本の茶界は大きく変貌を遂げていることも、また、事実である。そこで、後に詳しく検討を加えるが、明治初年から同42年にいたる茶会の開催数の年別推移を示した第1図を一瞥すると、明治31年（1898）と翌32年の間に茶会開催数に大きな断層を確認できる。これは周知のように近代における茶の湯の本格的な復興を担った和敬会の発足<sup>7)</sup>によるものであり、その有力なメンバーでもあった安田善次郎が記した『松翁茶会記』における茶会記録の急増が背景にある。本稿では和敬会の発足を画期として前後に大きく二分することとした。

## II 近代茶界の成立

前掲した第1図によれば、明治32年以前の茶会開催件数は、突出した明治14年（1881）の44回と翌15年の29回を含む明治13年から同19年にいたる7年間は多いものの、明治初年から10年（1877）にかけての時期と、明治22年（1889）以降は、同26年の12回が年間10回を超えているのみで比較的低調である。前述したように、安田善次郎は明治13年から『松翁茶会記』を書き始めており、特に、翌14年は2月と11月の2回、本所区横網町にあった別邸の茶室「又隠」で8連会を開いている。ちなみに、その際の招待者は38人と36人であった。なお、明治14年の安田善次郎の茶会は20回を、翌15年は18回を数える。これは『松翁茶会記』をデータソースとしたために生じた偏りであろう。なお、明治26年も12回のうちの7回までが安田善次郎の茶会である。一方、その理由を明らかにできないが、『松翁茶会記』では明治20年から同23年11月までは空白がみられ、さらに、明治26年3月以降、同32年11月まで安田善次郎が茶会を開催した記録は残されていない。この間は、明治20年5月に父を失い、その後1ヶ月にも及ぶ西日本視察があり、東京電灯の救済、日本銀行新築主管など多忙であり、また、明治26年以降は日清戦争や、その後の日清戦後不況などもあって茶の湯どころではなかったのであろう<sup>8)</sup>。第1図に

(第1表) 茶会開催回数集計

(明治元年～31年)

回数	人数	
70	1	安田善次郎
11	1	松浦 詮
10	1	前田利邨
8	1	米林俵作
7	2	星野清左衛門 益田克徳
6	2	千葉勝五郎 馬越恭平
5	3	益田 孝 條野伝平 久松勝成
4	3	三井高弘 脇坂正学 渡辺 驥
3	7	小野善右衛門 遠藤謹助 山本 寛 岡崎惟素 古筆了仲 速水宗寛 松平親良
2	15	東久世通禧 福岡千世女 辻 宗謙 小堀宗有 秋山孝次郎 川部宗無 寺島秋助 千 宗左 長 四良三 木全宗儀 藪内紹智 伊藤雋吉 栗山善四郎 小西義敬 加藤嘉庸
1	36	
合計	72	

戻るが、これに対して明治10年以前の時期は、年間5回が最多であり、茶会の記録が確認できなかった年も少なくない。ここにも明治前期における茶の湯の低迷が如実に表現されているのであろう。

前述したデータベースに基づいて明治初年から明治31年にいたる期間において茶会の開催が確認できた亭主を回数順に集計したものが第1表である。亭主数は72人であり、参考までに茶会の開催回数が2回以上の亭主の名前は全て書き上げておいた。しかし、半数の36人が1回の茶会の開催に止まっている。即断することは慎まなければならないが、数寄者とするには躊躇を感じる。首位に立つ安田善次郎の70回は、

前述したような『松翁茶会記』を情報源としているためであろう。

後掲する和敬会発足以前の茶人の存在形態を示した第3表を参照しつつ第1表を検討する。ただ、『日本紳士録』は明治22年（1889）、『人事興信録』は同36年（1903）に第1版が刊行されているものの、データベースとの突き合わせを行っても茶人の登載者は少なく、『私記・茶道年表』や『茶人系譜』などで補った。安田に次いで11回の松浦 詮と10回の前田利邨（虚心庵）が2位と3位に位置している。松浦は先に紹介したが、前田利邨も加賀前田家の分家であった旧加賀大聖寺藩主である。同様に久松勝成（忍叟、5回）、脇坂正学（不備庵、4回）、松平親良（3回）らも、その出自は旧藩主層であった。なお、東久世通禧（古帆、2回）は幕末期の「七卿落ち」の一人に名前を連ねた公家として有名である。また、渡辺 驥（中州、4回）、遠藤謹助（3回）、寺島秋助（2回）、伊藤雋吉（宗幽、2回）といった武士階級出身の政府官僚や軍人たちも見逃せない。

後に近代数寄者として茶界をリードすることになる馬越恭平（6回）、益田 孝（5回）などとともに、馬越や益田を茶の湯の世界に誘った益田克徳（7回）や小西義敬（2回）の名前も確認できる。小西は明治27年（1894）に死去しているためか、茶会回数は2回と少ない。

これに対して、米林俵作（8回）、星野清左衛門（7回）、千葉勝五郎（6回）、條野伝平（朧月庵、5回）といった商人層出身の実業家たちが多数名前を連ねている。『日本紳士録』などへ掲載されるような豪商層ではないが、近世期の旦那芸として茶の湯を嗜んでいた大商人の伝統を引き継ぐものであろう。三井高弘（松籟、4回）もこの範疇に加えてもよいだろう。

さらに、山本 寛と速水宗寛（守三軒）は3回茶会を開催しているが、2回グループには小堀宗有（瓢庵）、川部宗無（無極庵）、千 宗左（惺斎）、木全宗儀（松柏園）、藪内紹智（竹翠）など、茶道諸流

（第2表）茶会出席数集計

（明治元年～31年）

回数	人数	客
100	1	安田善次郎
26	1	渡辺 驥
18	1	秋山孝次郎
17	1	星野清左衛門
16	1	條野伝平
15	1	米林俵作
14	1	千葉勝五郎
13	3	栗山善四郎 脇坂正学
11	2	益田克徳 加藤
10	3	東久世通禧 長 四良三 遠藤謹助
9	5	柏木彦兵衛 木全宗儀 高津金七 武井守正 平岡熙一
8	3	古筆了仲 益田 孝 松浦 詮 林
7	7	奥村信造 小西義敬 鈴木安蔵 寺島秋助 驥夫人 野村
6	9	前田従四位 岩原惟一 桑原平七 飯田義一 古筆了悦 菅沼董雄 前田利邨 馬越恭平 小林
5	12	大蔵喜八郎 三遊亭円朝 朝吹英二 岡崎惟素 木村正幹 渋沢栄一 斎藤専三 三田葆光 海老原 金兵衛 古筆 中井
4	61	
3	33	
2	62	
1	278	
合計	485	

の家元や茶匠の名前を多数確認できる。明治前期から中期にかけて茶の湯は低迷していたといわれるが、家元や茶匠たちも茶の湯の灯を消さなかったのである。

次に第2表によって茶客を検討しておきたい。茶客は485人を数えるが、57.3パーセントの278人が1回のみの茶会への出席者であり、5回以上であるものは1割に過ぎない。5回以上者は名前を書き上げておいたが、前述したように苗字だけの記載もあり、完璧を期することができなかった。仮に前田従四位が前田利邨であるとすると、前田利邨の茶会への出席回数は12回となる。同表でも『松翁茶会記』を主な情報源としているために安田善次郎が100回で首位を占めてい

(第2図) 和敬会成立以前のネットワーク

	安田善次郎	松浦詮	米林俵作	益田孝	馬越恭平	條野伝平	千葉勝五郎	前田利惣	脇坂正学	渡辺驥	星野清左衛門	松平親良	東久世通禧	益田克徳	小野善右衛門	小西義敬	秋山孝次郎	長四良三	遠藤謹助	速水宗寛	久松勝成	栗山善四郎	加藤嘉庸	寺島秋助	福岡千世女	藪内紹智	山本寛	
安田善次郎	X	9	8	2	4	5	6			6	6		2	4	3	2	2	2	3		3	2	2	2				73
渡辺驥	11	2	3		2	2				X			2															22
條野伝平	8					X	2			2								2										14
秋山孝次郎	6		4								2						X											12
星野清左衛門	10										X																	10
千葉勝五郎	8						X																					8
柏木彦兵衛	5				2																							7
益田克徳	2			2			3							X														7
米林俵作	7		X																									7
脇坂正学	7								X																			7
飯田義一	3																			3								6
栗山善四郎	2	2											2									X						6
東久世通禧	2	4											X															6
長四良三	5																	X										5
前田利惣								X				3													2			5
岩原惟一	2		2																									4
遠藤謹助	2		2																X									4
鈴木安蔵	2														2													4
寺島秋助	4																							X				4
益田孝				X	2									2														4
加藤嘉庸	3																						X					3
松浦詮	3	X																										3
賞春軒紅萼								3																				3
前田健次郎		3																										3
前田從四位									3																			3
蓮静院								3																				3
小野善右衛門	2														X													2
小西義敬	2															X												2
池田從三位									2																			2
朝吹英二				2																								2
上野山増興												2																2
梶田清									2																			2
金沢竹鷲								2																				2
加納鏡哉				2																								2
木全宗儀																										2		2
葛野九郎兵衛								2																				2
桜井香雲				2																								2
富永冬樹				2																								2
橋本抱鶴						2																						2
林和作																	2											2
伏見正三位									2																			2
松平確堂												2																2
三井高弘		2																										2
山澄力蔵					2																							2
山本宗雄																									2			2
奥村信造															2													2
高津金七						2																						2
武井守正	7																											7
渡辺驥夫人	7																											7
平岡熙一	4																											4
奥村信造	4																											4
高津金七	3																											3
古沢経範	3																											3
天野嘉四郎	2																											2
小川松民	2																											2
川上宗順	2																											2
小林年成	2																											2
古筆了悦	2																											2
斎藤専三	2																											2
菅沼董雄	2																											2
鈴木要三	2																											2
三野村利助	2																											2
森村市左衛門	2																											2
大倉喜八郎	2																											2
岡崎惟素	2																											2
	148	22	19	12	12	11	11	10	9	8	8	7	6	6	5	4	4	4	4	3	3	3	2	2	2	2	2	



る。第 2 位に位置する渡辺 驥は明治 29 年（1896）に死去するが、26 回も茶会に出席しており該時期の東京の茶界をリードする立場にあったといつてよい。また、秋山孝次郎（18 回）から遠藤謹吉にいたる 12 人の 10 回以上層の名前は第 1 表の亭主名においても確認でき、彼等が和敬会が発足する以前の東京を舞台とする茶界の中核的な部分を形成していた。これに対して後年、近代数寄者として頭角を顕すことになる益田 孝（8 回）、馬越恭平（6 回）、朝吹英二（柴庵、5 回）などの地位は相対的に低い。ところで大倉喜八郎（鶴彦、5 回）や渋沢栄一（5 回）の名前を見逃すことはできない。日本資本主義の草創期において財界のリーダーシップをとった実業家たちが茶会で顔を合わせていたことは甚だ興味深い。事実、安田善次郎と大倉喜八郎は明治 14 年 12 月の桜井敬長の茶会、同 15 年 3 月の益田 孝の茶会、同 16 年 3 月の石井邦猷の茶会で 3 回同席している。一方、渋沢栄一は三井の大番頭であった三野村利左衛門の娘婿で三井銀行総長代理で日本銀行理事の三野村利助と一緒に明治 13 年 3 月の安田善次郎の本所区横網町別邸で開かれた茶会に招かれている。また、三井の番頭である斎藤専三も安田善次郎の茶会に 2 回出席し、斎藤と安田の二人は他の茶会でも 2 回同席している。後の財閥の枠を越えた交流をみることができる。

さらに『松翁茶会記』を詳細に検討するならば財界人の茶会での交流の事例は少なくないだろう。一例をあげれば、時期的には和敬会発足以後に属するが、明治 35 年（1902）3 月 28 日に安田善次郎は山本達雄総裁、高橋は清副総裁をはじめ 19 人の日本銀行重役陣を茶会に招き、安田銀行頭取安田善之助、同行福島支店長安田善八郎、同行庶務部長中根虎四郎などを相伴させている。第 6 版『銀行会社要録』に記載された同年の日本銀行の役員は 24 人であり、森村市左衛門、広瀬宰平、深井英五などは欠席しているが、日本銀行の役員をそっくり茶会に招待したかたちである。ちなみに、安田善次郎は日本銀行の大株主にも名前を連ねている。

安田善次郎の日本銀行重役陣の茶会招待は兎も角、これまでの検討で、明治 32 年の和敬会発足以前の東京を中心とする茶界は旧大名、公家、大商人、茶匠たちによって担われていたといつてよいだろう。

次に本稿の課題でもある茶人達のネットワークの析出に移りたい。第 2 図は前掲の第 1 表で 2 回以上茶会を開催し、同一人を 2 回以上招いた亭主名と、招かれた茶客の出席回数を書き上げたものである。煩雑さを軽減するために茶客も 2 回以上とした。配列は亭主では茶客の多い順に、茶客では出席回数の多い順に並べた。安田善次郎は 39 人の茶客を自らの茶会に複数回招いており、その数は延べ 148 回にも登る。その一方で、安田は 19 人の亭主の茶会に複数回出席し、出席回数は 73 回を数える。これは繰り返し述べているように『松翁茶会記』を主な情報源としたためであり、安田善次郎が茶人として突出した存在であったことを意味しない。

亭主数は 27 人、客数は 65 人であり、「X」で記されている亭主と茶客の両方に登場する重複を除いた 72 人が和敬会発足以前の東京を舞台とする茶界を構成していた茶人といつてよい。しかし、武井守正以下の 18 人は安田善次郎の茶会への複数出席で補捉されたものであり、他の亭主が開いた茶界への出席も考えられるが、ここでは検討の対象としない。事実、武井守正は該時期に遠藤謹助と柏木庄兵衛の茶会に 1 回ずつ出席し、安田善次郎と同席している。

第 2 図を構成しているはいくつかのグループごとに検討を加えたい。

安田善次郎は後に近代数寄者として頭角を顕す益田 孝や馬越恭平らの茶会に出席しているが、この時期においては益田 孝を自らの茶会には招いていない。また、益田 孝をはじめ三井系の実業人を茶界に引き入れたといわれている益田克徳は安田と益田 孝の双方と結び付いており、馬越恭平も安田を 4 回、益田 孝を 2 回自らの茶会に招いている。さらに、益田克徳を茶界に誘った小西義敬と安田は 2 回ずつお互いの茶会に出席している。すでに述べたが益田 孝が明治 29 年（1896）からはじめた大師会を分析対象としていないので、第 2 図においては益田 孝の存在が相対的に低く表現されている点は注意を促しておきたいが、朝吹英二と富永冬樹は益田 孝の茶会に 2 回出席している。なお、富永は益田 孝の義兄である。

(第3表) 明治前期の茶人の存在形態

氏名	号	流派	師匠	
前田利邨	虚心庵	藪内流	藪内竹翠	旧加賀大聖寺藩主、太政官修史局
米林俵作				本郷二丁目居住、第九十五国立銀行取締役
益田克徳	無為庵、無松庵	不白流	川上宗順	益田 孝の実弟、東京海上保険支配人
星野清左衛門				日本橋居住、砂糖問屋、伊勢屋
千葉勝五郎				高利貸、歌舞伎座を創設
條野伝平	朧月庵			東京日日新聞、歌舞伎座を創設
脇坂正学	不備庵	宗徧流	吉田宗賀	旧播州辰野藩主
渡辺 驥	中州	宗徧流、小堀流	小堀宗本	大審院検事長、貴族院議員
遠藤謹助				大阪造幣局長、一番町居住
小野善右衛門				第一銀行副頭取、小野組
山本 寛	麻溪	石州流	山本宗雄	『茶事年鑑』、『古今茶湯集』編纂
速水宗寛	守三軒	速水流	速水彦達	速水流家元
古筆了仲	朗照庵	石州流	葛田宗代	古筆鑑定家
松平親良		石州流		旧豊後臼杵藩主、子爵
福岡千世女				福岡笠翁夫人
長 四良三		不白流	川上宗順	東京鎌倉河岸に居住
栗山善四郎				料理屋八百善主人
川部宗無	無極庵	表千家	千 宗左	東京の表流家元代理
木全宗儀	松柏園	表千家	松尾宗古、碌々斎	『茶事年鑑』、『古今茶湯集』編纂
小西義敬		宗徧流		郵便報知新聞社長
辻 宗謙	虚舟	不白流	石塚宗通	旧備前池田藩士
寺島秋介				内務省社寺局次長、男爵
藪内紹智	竹翠	藪内流	9世紹智	藪内家10世、北野大茶会再興
加藤嘉庸	不易庵			東京神田岩井町居住
小堀宗有	瓢庵	小堀流	小堀宗本	小堀家10世
千 宗左	惺斎	表千家	碌々斎	表千家12世

典拠：『私記・茶道年表』、『茶人系譜』、『昭和茶道記』、『日本紳士録』

これに対して安田善次郎を核とする秋山孝次郎、星野清左衛門、條野伝平、千葉勝五郎、米林俵作といった実業家たちの11人のグループを確認できる。『日本紳士録』などによっても社会的地位を必ずしも明確にはできないが、江戸あるいは東京の豪商層を中心としたネットワークが形成されていたと考えられる。なお、栗山善四郎は料理屋八百善の主人であり、料理を通じて茶会を支えていた存在である。

旧大名層では前田利邨と脇坂正学を核として10人からなるネットワークの存在を確認できる。仮に前田従四位が前田利邨であるとすれば、前田と脇坂は相互に茶会に招きあっているものの、2人の茶会の出席者は重ならず、比較的閉じられた人的関係にあることが読み取れる。ただ、脇坂正学が安田善次郎の茶会に7回出席していることは両者の強い結び付きを示し、脇坂を核とする旧大名層のグループは、脇坂と安田の結び付きを媒介項として該時期の東京の茶界のネットワークに繋がっていたのである。

第2図からは後の和敬会の発足に繋がる活動も看取できた。これまでも度々参照してきたが和敬会の発足以前の茶人の社会的な存在形態を示した第3表によれば、流派が判明したのは15人と少ないが、不白流、宗徧流、表千家、石州流が3人ずつで拮抗し、藪内流が2人で続いている。また、前述したように旧大名層や実業人たちに交じって家元や茶匠もかなりの数に登る。東京を中心とする該時期の茶界では一定の影響力を保持していたことが明かとなった。さらに、実業人と目される人物は少なくとも9人はいる。江戸町人による茶の湯の伝統を継承するものであり、彼らは明治前～中期の東京の茶界を支えた存在であった。

## Ⅲ 和敬会の発足

前述したが第 1 図によれば、明治 32 年を画期に茶会は急増する。

筆者としては和敬会の発足にともなう会員たちの茶事活動の活発化によるものであると考える。本節では和敬会が発足した明治 32 年から高橋義雄『東都茶会記』で記述が開始される前年の明治 42 年までの 11 年間を対象期間とする。この間、確認できた茶会は 415 回であり、明治 32 年からの 4 年間は毎年 50 回を超える茶会が開催されていた。ちなみに亭主数は、個人を特定できない「三井」を除いて 63 人であり、茶客数は延べ 2,072 人を数える。

前節と同様に茶会の開催が確認できた亭主の回数順集計の検討からはじめたい。第 4 表は明治 32 年から同 42 年にいたる期間の亭主を開催順に並べたものであり、2 回以上の亭主は名前を書き上げておいた。なお、氏名の「WA」は和敬会の会員を示しており、大文字の場合は「十六羅漢」と称された 16 人であった発足時の会員を、小文字のそれは、死亡した会員の欠員補充の意味合いをもって新たに参加した会員を意味する。

第 4 表を見ると僅かの差で安田善次郎を抑えて益田 孝が首位に立っている。『風流記事』の使用によるものとも考えられるが、益田は既に明治 29 年（1896）から品川御殿山の自邸において大師会を催しており、東京の茶界では大きな存在となっていたのである。それは兎も角、「三井」は三井高弘か三井高保のどちらかであり、第 4 表で名前の挙がっている 40 人のうちの 26 人までが和敬会会員であり、4 回以上者に限ると非会員は浅田正文、田村太兵衛、益田克徳の 3 人に過ぎない。明治 30 年代の東京の茶界において和敬会の存在が如何に大きかったかを見せつけるものであろう。和敬会では会員による「順会システム」を採用していたために、10 回以上茶会を開催している会員が 13 人を数えるが、発足時からの和敬会員としては安田善次郎と松浦 詮が突出しており、これに岡崎惟素（淵仲）が続く。安田と松浦が初期和敬会の中核的な存在であったといえるだろう。

(第 4 表) 茶会開催回数集計

(明治 32 年～42 年)

回数	人数	
49	1	wa益田 孝
46	1	WA安田善次郎
40	1	WA松浦 詮
24	1	WA岡崎惟素
17	1	WA青地幾次郎
16	1	WA松浦 恒
14	2	WA東久世通禧 WA石黒忠恵
12	3	WA金沢三右衛門 WA岩見鑑造 WA東 胤城
11	2	WA久松勝成 WA三田葆光
10	1	wa三井高保
8	1	wa吉田丹左衛門
7	2	WA伊藤雋吉 三井
6	3	WA伊東祐磨 WA戸塚文海 浅田正文
5	4	WA三井高弘 wa竹内専之介 wa馬越恭平 田村太兵衛
4	4	wa瓜生 震 wa加藤正義 wa高橋義雄 益田克徳
3	2	大久保北隠 千 宗旦
2	11	大住喜右衛門 wa松浦 厚 速水友三郎 近藤廉平 洪沢栄一 千 宗左 千 宗室 南郷茂光 石塚宗通 井上 馨 渡辺 清
1	23	
	64	

WA、wa = 和敬会会員



しかし、発足時からの和敬会会員が上位に居並び、不白流の大久保北隠(二覚庵)、元老の井上 馨(世外)、財界のリーダーであった渋沢栄一などの名前も確認できるが、その一方で、浅田正文、瓜生 震(百里)、高橋義雄、加藤正義、近藤廉平(其日庵)など近代数寄者として大正～昭和期の東京の茶界を担う世代も登場しており、発足時の和敬会会員の死去にともなう新興の実業家を出自とするメンバーの補充に象徴されるように、世代交代の進行を読み取れるのも、また、事実である。

次に第5表によって茶客の動向を検討しておきたい。ところで、明治32年以降の時期、「吉田」は吉田丹左衛門以外に登場せず、34回の「吉田」は吉田丹左衛門と考えてよいだろう。なお、「三井」は三井高弘、三井高保、三井八郎右衛門(3回)、元之助(2回)、守之助(2回)、三郎助(2回)、武之助(1回)、養之助(1回)と三井一族での該当者も多く、按分すら困難であり、「池田」も同様である。ただ「山住」は山澄宗澄か力蔵、「桑原」は桑原平吉か平七のいずれかで、さらに、「柏木」は柏木彦兵衛、「黒田」は黒田綱彦であろう。「堀津」はハッキリしない。ここでは茶客数372人として検討を進める。参考までに5回以上者は名前と回数を書き上げた。1回のみ茶会への出席者は61.0パーセントの227人であって6割を超えるが、5回以上の出席者は13.7パーセントと、明治30年代以前の時期と比べると微増している。ちなみに、第2表の期間は30年であったのに対して、第5表においては10年余りと短期間であるにもかかわらず10回以上、言い換えれば、毎年1回は茶会に参加している勘定になる茶人の数は39人にも登る。東京を舞台とする茶界がより一層明確になってきたといえる。その実態は40回以上、毎年4回以上茶会を開催している亭主を発足時の和敬会会員が独占している点が端的に示しているように、和敬会の活動であったことはいうまでもない。しかし、この一方で、朝吹英二、浅田正文、高橋義雄、瓜生 震、加藤正義、馬越恭平、野崎広太、益田英作、益田 孝、近藤廉平といった三井

(第5表) 茶会出席回数集計

(明治32年～42年)

回数	人数	
200回以上	1	WA安田善次郎(202)
90～		
80～	4	WA松浦 詮(84) WA石黒忠恵(83) WA金沢三右衛門(82) WA青地幾次郎(80)
70～	2	WA松浦 恒(73) WA岩見鑑造(71)
60～	2	WA伊藤雋吉(62) WA伊東祐磨(60)
50～	4	WA東 胤城(56) WA三田葆光(56) WA東久世通禧(50) W岡崎惟素(50)
40～	2	WA久松勝成(41) wa三井高保(40)
30～	2	吉田(34) 大久保北隠(33)
20～	4	WA三井高弘(27) 朝吹英二(25) 浅田正文(20) 三井(20)
15～	8	梅沢安蔵(19) 戸塚文海(18) wa高橋義雄(17) wa瓜生 震(16) wa加藤正義(16) wa馬越恭平(16) 野崎広太(15) 山本 寛(15)
10回以上	10	益田英作(14) wa益田 孝(13) 大住喜右衛門(13) 古筆了仲(13) 桑原(13) 近藤廉平(12) 山住(12) 益田克徳(11) wa竹内専之介(10) 木全宗儀(10)
8回	2	伊集院兼常 桑原平七
7回	3	WA吉田丹左衛門 下條正雄 岩永省一
6回	4	若井兼三郎 鈴木安蔵 黒田 堀津
5回	8	井上 馨 加納鋳哉 桑原平吉 佐藤 進 関 時古 山澄力蔵 柏木 池田
4回	21	
3回	17	
2回	56	
1回	227	
合計	377	

(第 6 表) 和敬会会員の存在形態

氏名	生年	没年	号	出身	流派	師匠	学歴	爵位	
*三田蓀光	1825	1907	檀園		石州流	松浦 詮			漢学者、歌人、幕臣
*久松勝成	1832	1912	忍叟、静得	東京				伯爵	旧松山藩主
*東久世通禧	1833	1912	古帆、竹亭、古帆軒	京都	宗徧流	吉田宗賀		伯爵	枢密院副議長、貴族院副議長
*伊東祐磨	1834	1906	玄遠	鹿児島				子爵	海軍軍人、貴族院議員
*東 胤城	1838	1909	不羨	大阪				子爵	旧三上藩主
*安田善次郎	1838	1921	松翁、福々子、是如庵	富山	裏千家	川上宗順、11 世祿々斎			安田商店、安田銀行
*戸塚文海	1839	1901	市隠、壅浦	愛知	不白流	大久保北隠			海軍軍医総監、愛国保険（社）、東京慈恵医院創立
*松浦 詮	1840	1908	心月、乾宗、稽詢斎	東京	石州流	豊田忠澄		伯爵	旧平戸藩主、鎮信流家元、貴族院議員
*伊藤雋吉	1840	1921	宗幽、懷玄斎、橘庵	京都				男爵	海軍次官、貴族院議員、共同運輸（社）
*岡崎惟素	1840	1905	淵冲、谷神庵	岡山	織部流	古田宗閔			三菱商事の創設に参与
*石黒忠恵	1845	1941	況翁、半月庵、不円	福島	遠州流	赤塚宗輯		男爵	軍医総監、枢密院顧問官、貴族院議員、日本赤十字（社）
*金沢三右衛門	1846	—	蒼夫						東京醸造（取）、麴町銀行（取）、幕府御用菓子商
*三井高弘	1849	1919	松籟、宗光、松風庵、如竹、維石	京都	表千家	12世惺斎		男爵	通称、八郎次郎、南家、三井物産（社）、三井鉱山（理）、第一銀行（取）
*青地幾次郎	1849	1926	湛海、機々庵、静和庵	東京	裏千家				札差、伊勢屋、東京板紙（監）
*松浦 恒	—	—	無塵、寿		石州流	松浦 詮			数寄者、松浦分家
*岩見鑑造	—	—	厳美、律庵						漆商、(株)就社（理事）、醗酵社（副頭取）、商工銀行（取）
馬越恭平	1844	1933	化生、流水庵主人、月窓庵、恭翁	岡山	不白流	川上宗順			大日本麦酒（社）、三井物産、東京火災保険、東京帽子、南満州鉄道、夕張炭鉱、貴族院議員
益田 孝	1847	1838	鈍翁、観濤、太郎庵、雲外、宗利	新潟	不白流	川上宗順		男爵	三井物産（社）
三井高保	1850	1922	精華、小柴庵	京都	表千家	11世祿々斎		男爵	三井高弘の弟、室町家、三井銀行（総長）
瓜生 震	1853	1920	百里	福井					大日本製糖（監）、三菱合資、麒麟麦酒（取）、東京海上保険（監）、東明火災海上（監）
竹内専之助	1853	1936	寒翠	東京	表千家	松田宗貞			織物商、大正のノ貫といわれた。
加藤正義	1854	1923	欽堂	鳥取				男爵	日本郵船（副社長）、共同運輸、日清汽船
高橋義雄	1861	1935	箒庵	茨城	表千家	藤谷宗仁、川部宗無	慶應義塾		三越（社）、王子製紙（社）
松浦 厚	1864	1934	鸞州、心月庵	東京	石州流	松浦 詮	ケンブリッジ大	伯爵	松浦 詮の子、貴族院議員
吉田丹左衛門	1871	—	楓軒、梅露庵	東京	不白流	大久保北隠			質商、佐野商店、旭日生命保険（取）、東海銀行（監）、渡辺治右衛門の義弟

\*は発足時の会員

典拠：『筥のあと』、『近代茶道史の研究』、『日本紳士録』、『人事興信録』、『国書人名辞典』。

や三菱の諸会社で重役を務めている実業人茶人は確実に増加しており、いわゆる近代数寄者の台頭には著しい。

近代の東京の茶界において和敬会の果たした役割が非常に大きかった点は何人も否定できないであろう。しかし、その理由の大半は該時期においては名鑑類の刊行が少ない点にあるが、石黒忠恵の『況翁茶話』の「公卿も大名も武官も医者も富豪も学者も、米や漆の商売の方もあって」という紹介は広く知られているものの、意外なことに和敬会会員の社会的な存在形態の悉皆的な検討はない。第 6 表は本稿で使用したデータベースの構築過程で明かとなった和敬会会員の存在形態である。ここまで克明に書き上げた事例はないので、これまでの記述と重複する部分も少なくないが、参考のために掲示した。

世代的にみると久松勝成、東久世通禧、東 胤城、松浦 詮など旧大名や公家を出自とする会員は天保期の生まれとなる。これに次ぐのが金沢三右衛門（蒼夫）、三井高弘、青地幾次郎（湛海）などの大商人たちである。すでに述べたが、発足当初の会員の死去にともなって新たに加わった和敬会の

第二世代ともいべき会員は松浦 詮の子息である松浦 厚（鸞州）を除き、新興実業家が主流となっている。流派が判明したのは17人である。表千家、不白流、石州流の3流派が各4人であるが、7流派にも跨っており、多様性をもっていた。また、爵位をもっているのは松浦 詮の伯爵を襲爵した松浦 厚を含め12人に登り、貴族院議員も7人を数える。これに加えて安田財閥の総帥である安田善次郎、三井財閥の三井高弘、三井高保、さらには三井物産の益田 孝、三菱財閥系の加藤正義、岡崎惟素など、該時期の実業界のリーダーたちが綺羅星の如く並んでいる。なお、吉田丹左衛門も東京随一の大地主と目される渡辺治右衛門の義弟である。これらの諸点から、改めていう必要もないが和敬会が明治後期の日本において隔絶したエリート集団であったことは間違いない<sup>9)</sup>。なお、和敬会は大正12年(1923)の関東大震災を契機に解散したといわれている<sup>10)</sup>。

#### Ⅳ 松浦 詮の百会茶会

最後に明治35年に松浦 詮が開いた天祥公追善茶会百会の招待者を検討して本稿を終わりたい。

第7表は松浦 詮の茶会百会の招待者を出席回数順に集計したものである。女性の招待者は括弧内に

(第7表) 松浦 詮百回茶会茶客集計

回数	人数	
5	2	岩見鑑造 東 胤城
4	8	金沢三右衛門 東久世通禧 石黒忠恵 三井高弘 安田善次郎 青地幾次郎 伊東祐麿 久松勝成
3	43 (2)	
2	52 (9)	
1	241 (59)	
合計	346 (70)	

括弧内は女性、内数である。

(第8表) 松浦 詮百回茶会出席者の存在形態

職業	議員	爵位
商人	44	18
官吏	35	4
実業家	35	
軍人	20	
茶宗匠	18	
医者	13	
幕臣	12	
教師	9	
士族	9	
学者・芸術家	8	
僧侶	7	
富農	5	
家扶	4	
酒造	2	
陶工	2	
釜師	1	
不明	23	

内数で示しておいた。招待客数の延べ数は517人であるが、複数回の招待客は105人を数えるために招待者の総数は346人であった<sup>11)</sup>。従って1回のみの招待者は全体の69.7パーセントということになる。4回以上出席者は参考のために氏名を書き上げておいたが、全員が和敬会会員であり、3回出席者のなかにも9人の和敬会会員を確認できる<sup>12)</sup>。このことから該時期

の東京の茶界に占める和敬会の存在の大きさを再確認できる。ところでこれまで見てきた茶会においては女性の出席者は極端に少なかったが、松浦の茶会百会では20.2パーセントに相当する70人が女性招待者である。なお、女性招待者のうち33人は招待者の夫人か令嬢であり、家族で同席しているケースが多かった。その中にあって33回目に下田歌子華族女学校学監をはじめ5人の、さらに61回目には細川潤次郎華族女学校校長ほか5人の華族女学校関係者が招待されている。これは松浦 詮が華族女学校などで茶道を教授していたことも背景にあると考えられる。事実、招待者には華族女学校の女教師などが6人はいる。なお、松浦 詮は生涯を通じて35人に「台子七通」、あるいは「台子九通」の許可あたえたが、そのうちの14人の名前を出席者のなかに確認できる<sup>13)</sup>。ちなみに35人の免許者のうち14人が女性である。

天祥公追善茶会百会の招待者の全てに肩書きが付されていたわけでないが、第8表は『日本紳士録』などと突き合わせを行って確認できた男性招待者の275人の存在形態で

ある。商人、官吏、実業家、軍人が上位に並び、これらで判明者の 59.8 パーセントを占めている。具体的にみると商人では骨董商、菓子商、料理屋、茶商などが目に付く。しかし、実に多様な職業人が招待されており松浦 詮の茶の湯を通じたネットワークが広く形成されていることを物語っていよう。貴族院や衆議院の議員であるものが 22 人を数え、爵位を有する者が 32 人に登ることともに和敬会のリーダーであり、鎮信流家元、旧平戸藩主、伯爵という松浦 詮の社会的存在を象徴しているだろう。

## 註

- 1) 熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、1980 年）。
- 2) 原田伴彦『近代数寄者太平記』（淡交社、1971 年）、熊倉功夫『茶道錦聚 6 近代の茶の湯』（小学館、1980 年）、前掲『近代茶道史の研究』、『太陽 日本経済を築いた数寄者たち』（平凡社、1982 年）、熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』（河原書店、1997 年）、『淡交別冊 近代の数寄者』（淡交社、1997 年）、松田延夫『益田鈍翁をめぐる 9 人の数寄者たち』（里文出版、2002 年）、熊倉功夫『近代数寄者の名茶会三十選』（淡交社、2004 年）。
- 3) 前掲『近代茶道史の研究』、筒井紘一「家元の茶の復興」（『茶道学大系 二』、淡交社、1999 年）。
- 4) 熊倉功夫は近代数寄者を生年順に 4 世代に区分している。筆者としても別段異論はないが、ここでは資料的な意味合いによる区分である。
- 5) 三井文庫には三井家の「茶会記」も何点か残されているが、多くの場合、茶客の記録を欠き、筆者の考えているような情報源としては使えない。
- 6) 『松浦詮伯伝』（1930 年刊）、第 2 巻。また、井上 馨（世外）も明治 20 年代末から茶会を開催しているが、「茶会記」が残されておらず、46 人を招いた「八窓庵開席茶会記」は明治 43 年（1910 年）4 月なので別稿で触れる。
- 7) 和敬会の発足を石黒忠憲（況翁）の『況翁茶話』の記述に従って明治 33 年（1900）とするのが一般的だが、『心月庵と鎮信流茶道』では明治 31 年である。本稿で使用した安田善次郎の『松翁茶会記』によれば、明治 32 年 9 月 20 日の松浦伯爵邸の観月会の記事に、和敬会会員のうち欠席した三井、戸塚、青地を除いた 12 名の名前が列記され、「則ち和敬会巡回茶連中なり」と記されている。また、2 日まえの 9 月 18 日の芝新銭座町の岩見鑑造の別荘観泉庵での茶会や、10 月の伊藤雋吉の茶事にも「巡回茶事」とある。なお、同年 6 月 5 日の松浦 恒の茶事は「順回」との書き込みはないものの戸塚、岩見、三田、青地、石黒とともに出席している。ここでは便宜的に明治 32 年で切った。
- 8) 矢野竜溪『安田善次郎伝』（中央公論社、1979 年）。
- 9) 安田善次郎をはじめ、三井、三菱などのビジネス・エリートの文化的動向については永谷 健『富豪の時代』（新曜社、2007 年）を参照のこと。
- 10) 前掲『近代数寄者太平記』、224 頁。
- 11) 前掲『松浦詮伯伝』には「来客総数五百二十一人にて、其の内、再度の者四十名、三会三十四名、四会十一名、五会一名なりき」とあるが、筆者の集計結果とは異なっている。なお、『心月庵と鎮信流茶道』（1933 年）も、その数値を踏襲している。
- 12) 具体的には伊藤雋吉、瓜生 震、岡崎惟素、加藤正義、益田 孝、松浦 恒、三田葆光、三井高保、吉田丹右衛門である。
- 13) 前掲『心月庵と鎮信流茶道』、56～59 頁。

【付記】 本稿は、平成 19 年度～20 年度科学研究費補助金の課題「近代数寄者の茶会記を素材とする政界・官界・実業界の横断的人脈形成に関する研究」の研究成果の一部である。